

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 マサバ

学名 *Scomber japonicus*

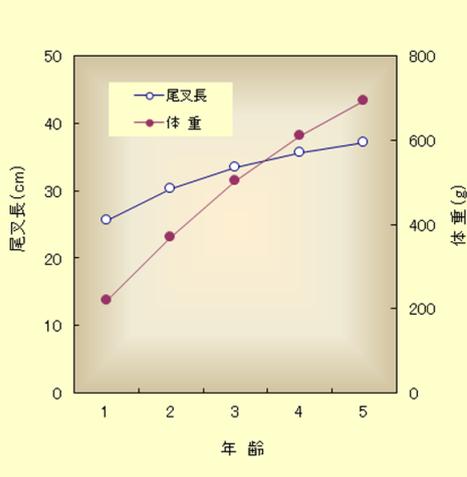
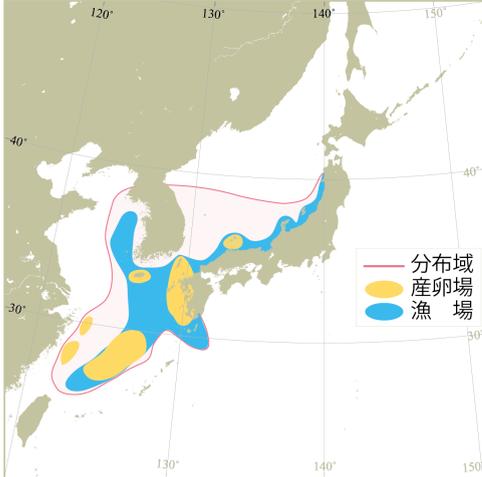
系群名 対馬暖流系群

担当水研 中央水産研究所
西海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 6歳程度
成熟開始年齢： 1歳 (60%)、2歳 (85%)、3歳 (100%)
産卵期・産卵場： 1～6月、東シナ海南部の中国沿岸～東シナ海中中部、朝鮮半島沿岸、九州・山陰沿岸
食性： 成魚は主にオキアミ類、アミ類、橈脚類などの浮遊性甲殻類、カタクチイワシなど小型魚類
捕食者： 幼稚魚は魚食性の魚類

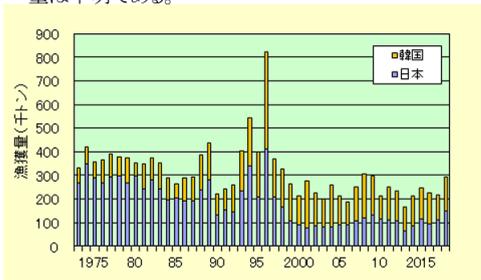


漁業の特徴

東シナ海・黄海・日本海のマサバ漁獲の大部分は大中型まき網漁業及び中・小型まき網漁業による。主漁場は東シナ海、韓国沿岸、九州北西岸、日本海西部であるが、2011年以降、九州北西岸及び日本海西部での漁獲が多い。

漁獲の動向

我が国の漁獲量は、1970年代後半には30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどまで減少した。その後、1996年に41万トンにまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2013年に6万トンと1973年以降で最も少なかったが、その後増加傾向にあり、2018年は15万トンだった。韓国は2018年に14万トン、中国は2017年に44万トン(さば類)を漁獲した。中国のマサバとゴマサバの魚種別の漁獲量は不明である。

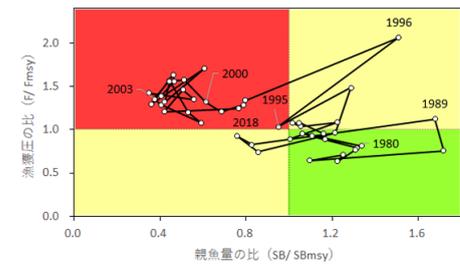
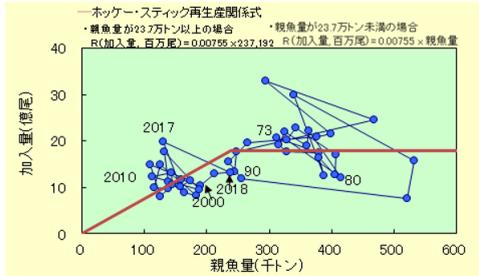
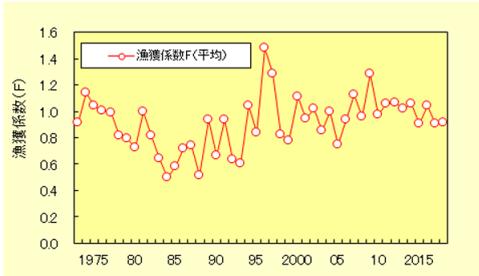
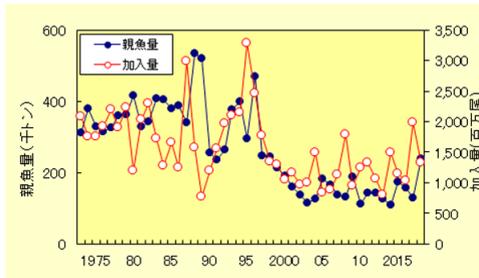
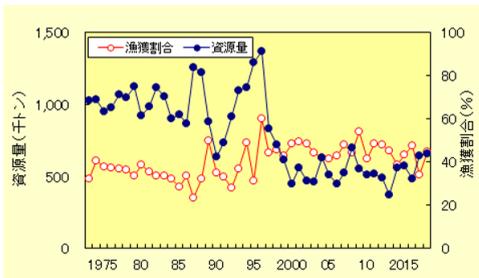


資源評価法

1973年以降の日・韓の年齢別・年別漁獲尾数に基づくコホート解析により、資源量を計算した。2003年以降の大中型まき網の年齢別資源量指標値を用いてチューニングを行った。自然死亡係数は0.4と仮定した。中国による漁獲は考慮していない。

資源状態

近年の資源量は、2014年から増加傾向を示しており、2018年は65万トンと推定された。近年の親魚量は、増減を繰り返しており、2015年と2018年に増加した。2018年は24万トンと推定された。近年の加入量(0歳魚資源尾数)は、2013年に低加入(8億尾)、2014年(15億尾)と2017年(20億尾)に高加入となった。2018年は13億尾と推定された。漁獲圧(漁獲係数:F)は、近年5年間では横ばい傾向である。本系群の再生産関係にはホッケースティック型関係を適用した。最適化法として最小二乗法を用いて関係式のパラメータを推定した。この再生産関係から導かれる最大持続生産量(MSY)は32万トンと推定された。MSYを実現する親魚量(SBmsy)は31万トンと推定された。SBmsyに対する2018年の親魚量の比は0.77であり(SB2018/SBmsy=0.77)、2018年の親魚量はSBmsyを下回っている。MSYを実現する漁獲圧(Fmsy)に対する2018年のFの比は1.24であり(F2018/Fmsy=1.24)、2018年のFはFmsyを上回っている。親魚量の動向は近年5年間の推移から増加と判断される。



資源評価のまとめ

- 2018年の資源量は65万トン、親魚量は24万トン
- 2018年の親魚量はSBmsy (31万トン)を下回る(SB2018/SBmsy=0.77)
- 2018年のFはFmsyを上回る(F2018/Fmsy=1.24)
- 親魚量の動向は近年5年間の推移から増加と判断される

執筆者: 安田十也・黒田啓行・林 晃・由上龍嗣

上記の再生産関係はMSYを実現する親魚量および漁獲圧を算出するため、研究機関会議での検討を踏まえて提案したものである。

資源評価は毎年更新されます。